

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 6 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02342

研究課題名(和文)ヘミングウェイの冷戦期ヨーロッパにおける受容

研究課題名(英文)Acceptance of Hemingway's Works in Cold War Europe

研究代表者

高野 泰志 (Takano, Yasushi)

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号：50347192

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：3年間の研究期間において、ヨーロッパでの調査を行った結果、本研究課題であるアーネスト・ヘミングウェイのヨーロッパ各国における受容をかなりの程度明らかにすることができた。とりわけファシスト政権がヨーロッパの中で例外的に存続していたスペイン、近年ナショナリズムの盛り上がりを見せるフランス、イタリアにおいて、かつてヨーロッパにおいて政治的に深く関わったヘミングウェイの現在の受容を調査することは、国家と文学者との関係を深く理解するのに有用であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：During the three-year research period, I discovered various new facts on Hemingway's acceptance in Europe in the cold war era. In Spain, Franco's fascist regime was preserved exceptionally in Europe until the 1970s; in France and Italy, the nationalistic tendency is gradually arising because of the terrorist attacks. It is very important to understand how Ernest Hemingway, who was politically active in and wrote about these countries, has been accepted and how his works have been read and discussed. This research will lead to a better understanding on the relationship between a country and a man of letters, politics and literature, and the government and an individual.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：Hemingway

## 1. 研究開始当初の背景

ヘミングウェイは周知のようにアメリカを代表する作家として、民主主義を象徴する作家として読まれてきたが、実際にはヘミングウェイは共産主義に対しても強い共感を持っていたことが次第に明らかとされてきている。ノーベル賞作家ヘミングウェイのイメージは、冷戦期のプロパガンダの一環として利用されてきた側面もあるのである。したがってヨーロッパの東西諸国でヘミングウェイがいかに受容されてきたかを調査することは、アメリカのこの冷戦プロパガンダが機能する様相を明らかにするに等しい。

これまで冷戦についての研究は決して少なくはない。たとえばアラン・ナデルの *Containment Culture: American Narratives, Postmodernism, and the Atomic Age* (1995) は“home”という概念から冷戦ナラティブを分析し、フランシス・ソーンダーズの *The Cultural Cold War: CIA and the World of Arts and Letters* (2001) はアメリカ中央情報局によるアメリカの芸術をプロパガンダとして用いる手法に関する研究である。また芸術作品以外に関しても、家庭用の大量生産品を扱ったグレッグ・カスティーリョの *Cold War on the Home Front: The Soft Power of Midcentury Design* (2010) などがある。

しかしながらこれらはすべてアメリカにおける自国文化に対する研究であり、アメリカ文学の研究においてアメリカ本国における研究動向に追従してきた日本では、他国から冷戦を相対化した研究がそれほど見られない。2001年には山下昇の編集による『冷戦とアメリカ文学—21世紀からの再検証』が出版されたが、これが長らく孤軍奮闘していたのである。2014年に村上東の編集による『冷戦とアメリカ—覇権国家の文化装置』が出版されたが、この論文集には本研究の申請者も執筆者のひとりとして参加し、2012～2014年度の科学研究費補助金基盤研究(C)「冷戦期アメリカ文学のヨーロッパ表象」の研究成果を発表することができた。本研究はこの研究成果の延長上に位置し、冷戦期アメリカ文学の政治的位置づけを行う。上記研究との大きな違いは(1)アメリカの冷戦期プロパガンダ政策そのものではなく、そのプロパガンダの結果生み出された作品が、共産圏と民主主義圏両方を含むヨーロッパ諸国において、実際にどのように受容されてきたのかを見ること、その結果、(2)ヨーロッパ諸国における受容と本国アメリカでの受容の差異を見ることで、アメリカにおける冷戦期文学作品の評価がいかに政治性を帯びているかを逆照射すること、の2点である。

## 2. 研究の目的

本研究は、冷戦期のヨーロッパ諸国において、ヘミングウェイ作品がどのような評価を受けてきたかを調査し、その評価の違いが冷

戦期の政治情勢にどのような影響を受けているかを考察するものである。これまでアメリカ作家の研究は本国アメリカの研究のみに関心が寄せられ、他国でどのような評価を受けてきたかはほとんど研究対象となっていない。しかし作家の評価は本来、母国を含め、それぞれの国の政治情勢に大きく左右されているはずであり、政治の影響を受けない「純粋な」評価などありえないはずである。本研究はアメリカを代表する作家の受容を比較検討することで、作家の評価がいかに政治の影響を受けているかを明らかにする。

ヘミングウェイは周知のようにアメリカを代表する作家と考えられ、文化的アイコンとして冷戦期にもっとも利用されていた作家であると言える。しかし実際にはヘミングウェイ自身は共産主義にも大きな共感を抱いており、1950年代にはカリブ海沿岸の共産主義革命に資金援助を行ってもいる(宮本フエンテス)。また近年の研究ではソヴィエト連邦のスパイとして登録されていたという記録も残っている(Haynes et al.)。こういった当時のアメリカにおいて「反アメリカ的」とみなされる傾向にも関わらず、ヘミングウェイがもっとも「アメリカ的」な作家として今日においても通用しているのは、冷戦期におけるアメリカ政府のプロパガンダの結果にほかならない。

ヘミングウェイと同時代の作家ウィリアム・フォークナーも同様に政治的目的から当時アメリカの文化政策として活用されたことが知られているが、フォークナーに関してはシュウォーツの研究が既にある。しかしフォークナーと同じように晩年、冷戦期になって『老人と海』をきっかけに再評価され、アメリカの国家戦略に組み込まれたヘミングウェイに関しては、いまだにこの方面からはほとんど研究されていない。ヘミングウェイが晩年居住し、後に共産主義革命を成し遂げるキューバにおいてヘミングウェイがどのように受容されていたかを調査した宮本陽一郎がいるのみであり、冷戦の主要舞台であったヨーロッパにおいて同様の研究はなされていない。

## 3. 研究の方法

### (1) ヨーロッパにおける1年間の現地調査

2017年4月より2018年3月まで1年間をかけてフランスを中心に滞在し、本研究の対象であるフランス、スペイン、イタリアにおいてヘミングウェイの関連地を訪れ、ヘミングウェイの足跡をたどった。また現地において研究者と交流し、ヘミングウェイ作品がどのように読まれ、どのように解釈の変化を被ってきたかを調査した。

まずはスペインにおいて伝記的にヘミングウェイがたどった足跡を忠実に追ひ、それぞれの場所での受容のあり方を現地研究者や書店などで確認した。バルセロナでスタートし、その後ポルトガルのコインブラま

に至る広範囲での調査であり、かつて前例のないものと思われる。

続いて『日はまた昇る』における登場人物の、フランスからスペインにいたる移動ルートをたどることにより、ヘミングウェイが作品に描いた地域での『日はまた昇る』の受容の状況を調査した。これは第一回のスペインにおける調査旅行と地域的な重なりはない。

同じ調査旅行の後半においてはマドリードを中心にして『誰がために鐘は鳴る』の舞台をめぐる、同作品の受容の状況を調査した。

その後ヘミングウェイ研究においてとりわけ重要な場所であるパリに関しては3度の調査研究をこなしている。

イタリアにおいてはヘミングウェイの伝記においてきわめて重要な意味を持つ1927年のガイ・ヒコックとの自動車旅行の跡をたどり、それぞれ現地において受容の調査を行った。これも北イタリアのほぼ全土をカバーする広範囲における調査であり、前例はないと思われる。

また長期間ヨーロッパで滞在することのメリットを活かし、従来ヘミングウェイ研究においてそれほど重視されてこなかったヨーロッパの国々でも同様の調査を行っている。ドイツ・オーストリアはほぼヘミングウェイの作品で描かれることはなく、伝記的にもほぼ触れられることはない。またロンドンもとりわけ重要視されることもなかった。しかしそういった土地での受容を調べることは、スペイン、フランス、イタリアでの調査結果と対照する意味でも重要であるだけでなく、ヘミングウェイと直接深く関連のない地域での需要もまた研究上の意味があると思われる。

#### (2) 国内での学会発表

2015年10月には日本アメリカ文学学会全国大会においてシンポジウムをコーディネートし、そこでその段階での研究成果を発表するとともに、ヨーロッパでの現地調査のための示唆を多くの研究者からもらうことができた。

また同年12月には日本アメリカ文学学会北海道支部において講演を依頼され、その場で10月のシンポジウムとは異なる内容の研究成果を発表した。ここでも会場の研究者からその後の研究の方向性を決める数多くの示唆をもらうことができた。

2017年11月には日本ヘミングウェイ協会シンポジウムにおいてヨーロッパにおける現地調査の成果を公表することができた。ここでは3年間の研究成果の多くを盛り込み、年度末の単著出版のために有用な意見をもらうことができた。

## 4. 研究成果

### (1) 論文の掲載

2015年にはヘミングウェイではないが、関連した作家に関する同様の研究成果として『英文学研究』92巻に『夜はやさし』の欲

望を読む』を掲載した。これはヘミングウェイと交流もあった同時代の作家F・スコット・フィッツジェラルドの作品を扱ったものであるが、地理的にも内容的にも本研究課題と大いに関連のあるものである。

また『北海道アメリカ文学研究』に初期の研究成果として「神への祈りと罪の贖い---『武器よさらば』に見られる宗教意識」を掲載することができた。

また出版自体は2018年6月以降の予定であるが、本研究課題におけるヨーロッパでの現地調査の成果の一部である論文「ジェームズ、ヘミングウェイ、覗きの欲望」を『ヘミングウェイ研究』18号に掲載予定である。

(2) 単著『下半身から読むアメリカ小説』の出版

3年間にわたる研究成果を含め、それ以前の研究内容と統合する形で単著を出版した。それ以前の科学研究費補助金を受けた研究内容を含んではいるが、今回の研究課題の成果を過去の研究に統合することに寄って、たんなる3年間の成果以上の成果公表にできたことを自負している。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

高野泰志「神への祈りと罪の贖い---『武器よさらば』に見られる宗教意識」『北海道アメリカ文学研究』第32巻 日本アメリカ文学学会北海道支部(2015年)

高野泰志「『夜はやさし』の欲望を読む」『英文学研究』第92巻 日本英文学会(2015年)

〔学会発表〕(計3件)

高野泰志「ジェームズ、ヘミングウェイ、覗きの欲望」第28回日本ヘミングウェイ協会全国大会シンポジウム「ヘミングウェイとパリ---他作家との比較を通じて」(2017年11月18日)内田洋行株式会社「東京 ユビキタス協創広場 CANVAS」(東京都中央区)

高野泰志「神への祈りと罪の贖い---『武器よさらば』に見られる宗教意識」第25回日本アメリカ文学学会北海道支部大会招待講演(2015年12月19日)北海学園大学(北海道札幌市)

高野泰志「Jake Barnesの欲望の視線---不倫小説として読む*The Sun Also Rises*」日本アメリカ文学学会第54回全国大会シンポジウム「逸脱する結婚---アメリカ文学と不倫のエロス」(2015年10月11日)京都大学(京都府京都市)

〔図書〕(計2件)

高野泰志『下半身から読むアメリカ小説』松籟社(2018年)408頁

竹内勝徳・高橋勤編、高野泰志ほか著『身体と情動---アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』彩流社(2016年)17-38頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高野 泰志 (TAKANO YASUSHI)

九州大学大学院・人文科学研究院・准教授

研究者番号：50347192